

## 里の子ども達から学ぶこと

雪深い戸沢村角川の里にもようやく春の兆しが見え始めた。まだ1メートルを超える積雪に覆われてはいるが、先日雪解けで増水する小川の淵でフキノトウを見つけることができた。確実に春が到来しつつあるのを感じる季節となってきた。

子ども達にとって3月は卒業式のシーズンだ。先日、地元角川小中学校の卒業式にお招きいただいた。いい式典だった。僻地校である角川小中学校は、その名の通り小学生と中学生が同じ校舎で学ぶ小中併設校である。今年の卒業生は、小学校で14名、中学校ではわずか6名だ。しかし、大規模校に負けない感動を味わうことができた。子ども達が式典で互いに交わすメッセージは、小規模校ならではのものだろう。長年温めてきた顔の見える濃密な時間が創り出したのだと思う。式典の最中、彼らが創り出す親密な空気が会場を暖かく包み込んでいるのを、ずっと感じる事ができた。

だが、小さな集落で育つということから生じる親の不安もある。保育所から中学卒業まで、ずっと同じメンバーで兄弟のようにして育ててしまうことは、必ずしも良いことばかりではないというのである。高校に行ってから他の生徒となじめず人間関係を作るのに苦労する、あるいは少ない人数では競争心を育てることが難しいなど、様々なマイナス面が論議されている。

一方で、こうした地域集落だからこそすばらしい原体験を子ども達に与えることができるのではないかと、地域にはその独自の価値があり、原体験を子ども達に積ませていくことが大切ではないかという動きもある。子どもだけではなく、大人もまたそうした地域の価値に気づき学んでいこう、子どもと共に大人も育っていこうという「共育」運動が戸沢村では盛んである。

その動きの一つが「地元学」だ。地元学とは地域集落とその周辺を取り囲む里山や川を住民や子ども達、外部参加者が実際に一緒に歩いて、地域の「あるもの探し」をする取り組みだ。角川里の自然環境学校では、集落で見つけた興味深いものを1枚のカードに1項目ずつ写真と地元の説明を入れてまとめている。最初は「何にもない村だから・・・歩いたって大した物ないよ」と言う農山村の住民。だが、実際にやってみると、いつも半日で100枚~300枚のカードが作られる。地元学において子ども達は地域の発見者であり、アイディアマンでもある。先日、畑ヶという集落で地元学を行った際、硬雪の里山を子ども達は早速「ケッツスベリ」（雪の上をそのままお尻をついて滑る）をして楽しん

でいた。それを見て「まだ木々も山菜も芽吹かないこんな時期でも山は面白いもんなんだな・・・」と地元の長老さんがつぶやくのが印象に残った。昔の道具を見つけたり、動物を見つけたりして目を輝かせて見入る子ども達。大人達は子ども達のフレッシュなまなざしと行動に驚かされる。大人達にとっては何気ないつまらないものが、子ども達にとってはまったく違ったものとして映り、大人の前に出される、まるで魔法だ。

地元学をきっかけにして大人達も地域のことを生き生きと語り出すようになった。それが子ども達によってさらに新しいパワーを与えられて、今、角川の里の地域作りを支えようとしている。

戸沢村の「共育」運動の目指すべきものを、子ども達は既にもう示してくれているように思える。角川地区の最も奥まった集落に住む今年卒業する中学生の作文の一部を紹介したい。

「初めて聞くようなことを生き生きと話す地域の大人達が、とても大きく見えました。まさに角川での地元学は、便利さなど表面的なものにあこがれ、自分の身近なものの本当の価値に気づけなかった僕が、足元を見つめなおす貴重な体験となったのです。考えてみれば若者がいない、活気がない、大型スーパーがなく不便だというマイナス面だけがクローズアップされてきました。『昔はこんなじゃなかった』とは言っても、それに対してどのようにすれば若者が引き止められ活気を取り戻せるのか、真剣になって解決策を考え実行しようとする人は誰一人いませんでした。でも、今は・・・大人が立ち上がり、解決策を考え、大切な文化を子ども達に伝えようとしています。・・・今、角川は、中から変わろうとしています。真剣になっている大人の心を、僕たち子どもがしっかり受け止めなければならないと思っています。」

こうした子どもたちの切なる願いを本当の意味で実現できるかどうか、角川の里の人々は今その真価を問われているのである。